

聖書：ヨハネの黙示録 17：1～6

説教題：大淫婦の姿

日時：2021年7月18日（朝拝）

前回、7つの鉢の幻の第7の場面を見ました。すでに見た7つの封印の幻、また7つのラッパの幻と同様、第7の場面は世界の歴史の最後の日、主の再臨の日の様子を描いたものです。ですから7つの鉢の幻はそこで終わりとなって、今日からまた別の新しい話が始まるのでは？と私たちは思います。ところが17章1節は「また、七つの鉢を持つ七人の御使いの一人が来て」と始まります。つまりこれから見る17章以降は、7つの鉢の幻と関係がある、その継続であるということです。御使いはヨハネにこう言いました。「ここに来なさい。大水の上に座している大淫婦に対するさばきを見せましょう。」先にまとめて言うなら、これから見る17～19章は7つの鉢の幻の内、特に第6と第7の幻をより詳細に語る部分です。私たちは16章12節以降の第6の幻において竜と獣と偽預言者の口から蛙のような3つの汚れた霊が出て来て、ハルマゲドンと呼ばれる場所に王たちを集めたと言われたのを見ました。またその後の17節以降の第7の幻において大きな都が3つに裂かれて、大バビロンが倒れた！と記された部分を読みました。この最後の場面にフォーカスしてより詳しく語ったのが、これから見る17～19章の内容です。

まず1節で御使いは、これから見せるのは「大淫婦に対するさばき」であると言っています。この大淫婦とは16章19節に出て来た大きな都、大バビロンのことです。大バビロンについては前回見ました。バビロンと言って思い起こすのは何と言ってもイスラエルを捕囚したあのバビロン、そしてさらに遡って創世記11章に出て来るバベルです。いずれも神を無視し、神の前に高ぶり、自らを神のように持ち上げようとしてきました。そのように神に逆らい、自らを誇るこの世の都市、文化、あるいはそのシステムをこれは指します。その大バビロンがここで「大淫婦」と呼ばれています。つまりこれは人々を誘惑し、正しくない道へ引き込む力を持っているということです。人々を引き付け、淫行へと誘う。ここでの「淫行」とは文字通りの汚れた性的行為のことではなく、一言で言えば偶像礼拝へ導くことです。しばしば偶像礼拝は性的乱れと関係しますので、そのことが排除されているわけではありませんが、ここでメインに考えられているのは霊的な淫行です。

この大淫婦は「大水の上に座している」と言われています。その昔、バビロンの都はユーフラテスの両岸に作られ、たくさんの運河が市内に巡らされました。まさに大バビロンは大水の上に座しているような町でした。そしてその運河を通し、水運を通して、全世界と交易し、全世界への影響力を持っていました。なおこの後の 15 節でこの淫婦が座している水は「もろもろの民族、群衆、国民、言語です」と言われています。この黙示録が書かれた当時、大淫婦と言えば、それはローマでした。ローマはまさに大水の上に座す大淫婦のように全世界の国々の上に君臨する世界の中心地でした。2 節に「地の王たちは、この女と淫らなことを行い」とあります。これは世界の国々はローマとの関係を通して益々まことの神から離れる方向へ導かれたということです。神ではなく、このローマとつながっていれば自分たちの生活は安全・安泰。そのようにローマに信頼し、いわばローマと淫らなことを行う。その後の「地に住む人々は、この女の淫行のぶどう酒に酔いました」という部分も同じです。特にその中心にあったのは経済的な繁栄だろうということを以前に申し上げました。そのことは以前も参照した 18 章 3 節や 9 節を見ると分かります。人々はそのぶどう酒に「酔った」とありますが、これは人々の判断力がこれによって弱くなったことも暗示すると思います。ローマとつながり、ローマからの恩恵にあずかってさえいれば、自分たちはいつまでも大丈夫だ。そのような偽りの幸福感に酔い痴れている。しかし御使いはこの「大淫婦へのさばきを見せましょう」と言いました。この大淫婦が倒され、さばかれることを御使いはこれから語って行くのです。

3 節で御使いはヨハネを御霊によって荒野へ連れて行きます。これはそこからこの大淫婦の姿をよく見るためでしょう。都と同一化し、都の一部となっていては都全体を正しく見ることはできません。そこで彼が見た大淫婦の姿が 3~6 節に記されています。大きく 3 つの点に分けて考えることができます。まずその姿の一つ目は彼女が「緋色の獣に乗って」いたことです。この獣とは何でしょうか。獣はすでに 13 章に出て来ました。ここに「その獣は神を冒瀆する名で満ちていて、七つの頭と十本の角を持っていた」とありますが、それは 13 章 1 節で述べられていた獣の姿と同じです。その獣が緋色であったことは、12 章 3 節でサタンである竜が「炎のように赤い」と言われていたことを反映するのでしょうか。獣はこれまで見て来た通り、悪魔の手下となって働くこの世の国家権力、政治的支配者を指します。当時で言えばローマ皇帝ドミティアヌスになります。その獣に一人の女すなわち大淫婦が乗っていました。この意味は大淫婦は獣とともに働くということです。大淫婦は獣と

一緒にこの世を惑わし、神と神の民に敵対し、人々を神から引き離すように働くのです。この獣と大淫婦にはどのような違いがあるのでしょうか。獣は政治的支配者で、これは力によって迫害します。人々を恐怖によって駆り立て、ローマ皇帝を拝まないなら殺す！と脅し、またそのことを実行します。一方の大淫婦は誘惑によって働きかけます。力によってではなく、魅力によって、人々の欲望に訴えて、快樂や楽しさへと引きずり込んで神への忠誠や服従の生活から人々を引き離す。昔のバビロンにおいても、黙示録が書かれた当時のローマにおいても、この2つはセットでした。そしてそれは今日においても同じでしょう。獣と化す為政者だけが問題なのではなく、私たちを誘惑へと誘う大淫婦も恐るべき敵なのです。

大淫婦の姿の2つ目は、彼女の魅力に関することです。4節前半に「その女は紫と緋色の衣をまとい、金と宝石と真珠で身を飾り」とあります。ここに彼女が何をもって誘惑するのかが示されています。一言で言えば経済的繁栄によってです。紫と緋色の衣は貴族や王が身につける高価な衣服で、金持ちたちの服です。宝石類もそうです。大淫婦はこれらで身を飾ります。そしてこれを見る人は引き付けられ、思うのです。彼女と関わりを持てば私もあのように栄えることができるのではないかと。18章12節には商人たちがこの大淫婦とつながって利益を享受していた姿が示されています。また一般人もあの栄えている帝国都市ローマとつながりさえすれば、私も豊かに生きることができるのではないかと駆り立てられる。そして他の大事なことをすべて犠牲にしてでも彼女のようにになりたい、あのように豊かでキラキラ輝く人になりたいと駆り立てられ、淫行のぶどう酒を飲み、適切な判断感覚を失ってしまう人になるのです。

しかしです！この幻が描く大淫婦の三つ目の姿は、その邪悪さ、その毒々しさです。3つのことがあります。一つ目は彼女が手にしていた金の杯に関することです。衣やアクセサリと並んで、これも高価なものです。しかしその中身は何だったでしょう。4節後半に「忌まわしいものと、自らの淫行の汚れで満ちた金の杯」とあります。「忌まわしいもの」とは端的に言えば偶像礼拝を指します。また「自らの淫行の汚れ」も、先に見た通り、文字通りの淫行よりも、人々をまことの神から引き離す偶像礼拝のことです。彼女が手に持つ金の杯は外側からは美しく見え、人々を引き付けますが、その中身は神が忌み嫌われる汚れで一杯。これをしっかり見つめなければなりません。

邪悪な姿の2つ目は額に記された名に表されています。そこにまず「大バビロン」と記され、彼女が自らをそのように誇っていることが示されています。また「淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」とあります。淫婦たちとは、大淫婦の彼女自身がそうであるように、人々を誘惑してまことの神礼拝から引き離すこの世の都市、文化、社会、システムなどを指します。忌まわしいものとは4節で見た通り、偶像礼拝を指します。それらの「母」と言われています。つまり大淫婦は、これらを次々に生み出す母のような存在である。世界各地に淫婦たちを生み出し、また忌まわしいものをまき散らし、神から離れて歩む人生へと人々を誘惑する力の母体であるということです。

邪悪な姿の3つ目は、6節にある通り、「聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っている」ことです。大淫婦は自分に従う者には地上的繁栄を約束し、祝福します。しかしその本質は神を無視し、神に逆らうものですので、キリスト者はその道を一緒に行きません。すると彼女は獣と一緒にになって迫害するのです。このためヨハネは島流しにされていましたし、アジアの教会には殉教者も出ていました。また経済的繁栄から取り残され、苦難と貧しさの中にあつたスミルナの教会もありました。大淫婦はその血に酔っているとあります。つまり迫害を楽しんでいる。我々はこのように豊かで栄えており、同じ道を行かないあの愚かなキリスト者どもはあのように苦しみ、いのちを落としている。そのように自分たちを誇り、祝杯を挙げる。

6節最後にヨハネはこれを見て「非常に驚いた」とあります。それは彼が見たものは彼が予想したものと大きく違ったからでしょう。「大淫婦のさばきを見せましょう」と言われたのに、ここにあるのはさばかれたものの姿ではありません。むしろ豪華絢爛で、豊かで、きらびやかな姿。ヨハネは思わず圧倒されたのではないのでしょうか。と同時にその聖徒たちの厳しい迫害の様子も見ました。彼はそれを見て、恐れ、戸惑い、ショックを受け、ある意味でうろたえた。その彼に対して御使いは7節で「なぜ驚くのですか」と言って、その秘められた意味について続く箇所ですっきりと説明して行きます。そこは次回見ることにします。

最後に2つのことを述べて終わりたいと思います。今日の箇所では今後の話の基礎となるものとして大淫婦の姿が示されただけでしたが、ここから次のメッセージは少なくとも受け取れると思います。それはうわべの美しさだけで判断して、騙されてはいけないということです。この大淫婦は魅力的です。彼女が通ったら誰もが振り向い

てしまいそうなほどです。素敵なお洋服を着て、輝く宝石で身を飾り、豊かさに満ちています。彼女について行くところこの世の人生の楽しみと祝福のすべてがあるかのようです。しかし同時にこの幻が示していたのは、彼女が手に持つ杯に忌まわしいものが満ちていたことです。あるいはその額に何と記されていたかということです。これらに目をつむって、ただ目に飛び込んでくる表面的な美しさ、きらびやかさに騙されて、彼女について行ってはならないということです。

私たちはこの具体的な例を黙示録の最初に記されたアジアの教会の中に見て来ました。たとえば2章18節から記されたティアティアラの教会がそうです。ティアティアラは紫布商人リディアの出身地で、ギルドと呼ばれる同業者の組合が組織されました。そしてそれぞれの組合にはそれぞれの守り神のような異教の神々がいて、その神殿で礼拝することが組合員には求められましたし、またそこで皇帝礼拝も行われたようです。唯一の神のみを拝むクリスチャンたちは、それを行わないため、組合員になれず、誰とも取引してもらえない経済的苦境に置かれました。そんな中、女預言者イゼベルはキリスト者であっても異教の宮で形だけ拝むのは構わないと言いました。むしろそのようにサタンとある程度関わり、その深みを知る人の方が強い信仰者だなどと主張しました。しかしそれはまさに大淫婦に従っている姿です。経済的な利益を得るため、神への忠実を後ろに置き、淫行のぶどう酒を飲んでいました。あるいは3章14節以降に記されたラオディキアの教会もそうです。彼らは「自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もない」と自己満足し、そのような繁栄を神の祝福のしるしとさえ思っていました。ところが主の判断によれば「実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっている。」淫行のぶどう酒を飲んで、判断する力を失っていたということでしょうか。今日の私たちも同じです。正しい働きを通して利益を上げるようにすることはもちろん良いことです。しかしもし経済的利益を優先して、神に従う歩みを幾分でも後回しにするなら、それは大淫婦に誘惑されて淫行のぶどう酒を飲む道に進むことです。あるいはこの世のきらびやかさ、豪華さ、流行、称賛に心惹かれて、そちらにこそ自分を満たすものがあるかのように追いかけ、神に従う歩みを後回しにすることも、同じ誘惑に見事にはまっていることです。いくら大淫婦が華麗な姿でアピールし、輝いているように見えても、その金の杯には毒が盛られていることを見過ごしてはなりません。ローマ人への手紙6章23節に「罪の報酬は死です」とあります。私たちは今日の大バビロン、大淫婦の正体を見抜かなくてはなりません。またこの大バビロン、大淫婦がこの後さばかれる結末を見て、正し

い道を選び取るように導かれないと思います。

もう一つは、今日は簡単に触れるにとどめますが、この大淫婦と対照的に今後示されるのはキリストの花嫁なる教会であるということです。今日の箇所です。7つの鉢を持つ御使いの一人が「ここに来なさい。大淫婦に対するさばきを見せましょう。」と言いましたが、そのさばきの後、同じ御使いがもう一度 21 章 9 節に出て来て、ヨハネにこう言います。「ここに来なさい。あなたに子羊の妻である花嫁を見せましょう。」そして 21 章 10 節以降で、この花嫁なる教会の美しさが示されます。ここには明らかな対比、対照があると考えられます。大淫婦の美しさは一時的、この世的で、さばきに定められています。しかもそれは一瞬の内に、あっという間に終焉を迎えることをこの後、私たちは読みます。その偽りの美しさに魅了されず、その邪悪さ、その醜さをしっかり見て取る者でありたいと思います。むしろキリストの真の美しさ、聖さ、正しさ、麗しさこそを見つめ、そこに真の満足と永遠の喜びを見出し、かの日にその花嫁として光と輝きの内に現れる教会であるように、その真に幸いな道こそを行く者へと、これからの章を通して導かれないと思います。